

選考をふりかえって

「エッセイ部門」 高校生の部 選考長 小川洋子

自由なテーマでエッセイを書くのは、本当に悩ましいことです。自分は一体何が書きたいのか、迷っているうちに規定の枚数を消化してしまう、という事態にもなりかねません。そんな難しいジャンルに挑戦してくれた高校生たちの意欲に、まずは敬意を表したいと思います。

最優秀賞、上村萌々香さんの「田舎で暮らす」は、ユーモアのセンスにあふれた愛すべきエッセイでした。軽トラックの荷台で、海賊の祖父を大砲でやっつける、じいじドッジボール。たけのこ探りの時にかいだ、竹林の獣のにおい。執念深いメスのクワガタ。アリの運ばれてゆくチョウ……。一つ一つのエピソードが五感を通して生き生きと伝わってきました。

ユーモアを描けるというのは、書くべきものを客観的にとらえる才能がある証拠です。自分自身を冷静に観察できる余裕があれば、真実にも出会えます。上村さん、どうかこの才能をのびのびと育てていって下さい。

優秀賞、小林由佳さんの「おじいちゃん」もまた、幼い頃、祖父母と過ごした記憶がテーマになっています。このエッセイで最も驚いたのは、祖父と再会する場面です。ほんの数行で読者を祖父のいる世界へ運びます。文章はあくまでも素直で、強引なところなどないにもかかわらず、自分がどこに立っているのか、読者に居場所を見失わせるだけの力を持っています。びしょ濡れになってサンダルを拾うおじいちゃんの姿が、胸に浮かんできました。

もう一つの優秀賞、富田紗英さんの「話す相手はどこに」は、現代社会のコミュニケーションの問題を真正面から取り上げています。実験にとどまらず、そこから視野を更に広げていった意識の高さに感心させられました。ラスト、見ず知らずのおばちゃんに、きちんとお礼を言う場面に心に残りました。これこそが、人間らしいつながり方だと実感できました。